

## 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 根岸雅史

学位申請者 和田朋子

論文名 「Investigating the Reading Construct: Effects of 'Question Types' on Reading Comprehension Test Performance of Japanese EFL Learners」

### 結論

和田氏から提出された博士学位請求論文「Investigating the Reading Construct: Effects of 'Question Types' on Reading Comprehension Test Performance of Japanese EFL Learners」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は全員一致して博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は、根岸雅史を主査に、副査として、田島信元教授（白百合女子大学）、高島英幸教授、投野由起夫准教授、中浜優子准教授を加えた5名で構成された。

### 論文の概要

本研究の目的は、日本人英語学習者を対象とした英語リーディング・テストの開発において、それぞれのテスト項目がどのような読解を求めているのかによりタイプごとに分

類し、それぞれのタイプと難易度との関係を明らかにすることにある。

本研究は大きく二つに分かれる。一つは先行研究から導かれる“local/literal”、“local/inferential” および “global/inferential” という枠組みによってリーディング・テストの設問タイプを定義することの妥当性の検証である。本研究では先行研究に加え、学習者の能力差も考察対象とした。もう一つは、それらの設問タイプが「尺度化」される際に、それぞれの設問タイプにどのような項目難易度の違いが生じるのかを明らかにするというものである。これについても、異なる能力の学習者間で、設問タイプの難易度の順位に差異が生じるかどうかの考察を行った。

本論文は全7章で構成される。第1章では、本研究の研究背景、目的および意義を論じている。ここでは本研究の目的として、Council of Europe の Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) や Association of Language Testers in Europe (ALTE) の ALTE ‘Can-Do’ statements に代表されるような、英語能力を指標化し、ある一定の能力と判断された学習者が「何ができて、何ができないのか」を説明する枠組み作りを、特に日本人英語学習者のリーディング能力について行う場合は、どのような要素をもとにした指標や枠組み作りが可能であるのかを明らかにする必要があるとしている。

第2章では、本研究に関係する先行研究のうち、リーディング能力の定義に対するさまざまなアプローチについて概観している。ここでは主に、リーディングにおいて学習者が英語の意味理解に到達するまでの過程について言及した研究をとりあげ、それらのプロセスを可能にする下位能力を、リーディング能力の構成概念の研究において、どのよう

に認識していくべきかの方向性を示している。リーディング能力の研究においては、学習者の読解プロセスを直接的に観察することはできないため、テストや言語プロトコルを用いて間接的に観察する。これらは学習者が読解を行った「結果」であるため、研究者は、リーディング能力を指標化するにあたり、学習者が読解において「どのような読解を求めた問題を解くことができたのか」という読解の結果に注目し、下位能力を定義すべきではないかとしている。

第3章では、本研究に関係する先行研究のうち、リーディング能力の測定に関するものを概観している。言語テストの研究では、学習者の英語能力を構成するさまざまな特性を引き出す手法に関する研究がさかんにおこなわれてきている。これらは大きくわけて2つのアプローチによって分類することができる。一つは、テスト開発や項目作成において、項目の作成規準や項目によって測定される能力をリーディング能力の下位能力をもとに、分析的に記述する手法である。もう一つは、テストの中で実施されるタスクを一つの完結した「行動」ととらえ、それを分析的に記述することはできないと考える手法である。本研究では、前者の下位能力をもとに記述するアプローチをとっている。これは、より汎用性のある解釈が可能な設問作成のためには、設問作成において、その設問に正解するためには、どのような能力が必要とされているのかを記述することが不可欠だと考えられるためである。

また、このような「設問タイプ」によってどのような学習者の読解結果が引き出されるのかという観点からテストを研究することを、設問タイプの「質的」な側面とする一方、その「量的」な側面はそれらの行動に付与される設問タイプの難易度だとしている。こ

の設問の「量的」な側面に焦点が向けられる際にも「下位能力」を基盤としたアプローチは必要不可欠である。テスト項目の難易度は一つの数値などで示されるわけだが、その数値は設問によって引き出された学習者の読解結果を構築するさまざまな下位能力の難易度の積み重ねだと考えられ、その下位能力の難易度を特定することが可能であれば、テスト項目全体の難易度を、それが作成される段階である程度は特定することが可能になるかもしれないとしている。

Wada (2003)では、Negishi (1996)をもとに、日本人英語学習者のリーディング・テストの解答を因子分析を用いて分析し、その結果、日本人英語学習者のリーディング能力は“local/global comprehension”と“literal/inferential comprehension” dimensionの二つの因子によって説明されることを明らかにし、それらをもとに、“local/literal”、“local/inferential” および “global/inferential” という3つの読みを引き出す設問タイプを提案した。「下位能力」を基盤とするアプローチのもとでテストの設問を作成するにあたり、‘two-dimensional approach’を用いることの妥当性を検証し、さらに学習者間の能力差や設問の難易度との関係を研究することで、設問タイプの尺度化の可能性を探るとというのが本研究の目的である。

第4章は、データの収集と分析の方法に関する記述である。本研究には2つのテストが用いられた。一つはGTEC for STUDENTS (ベネッセコーポレーション)をもとに作られたTest Set A、もう一つはTOEFLをもとに作られたTest Set Bである。Test Set Aは2つの能力グループの被験者に、Test Set Bは1つの能力グループの被験者に受験させた。Test Set Aの難易度に項目応答理論上相当する能力グループをGroup A-Low

(181人)、テスト難易度の低い能力グループを Group A-High (180人) とし、Test Set B の難易度に相当するグループを Group B (257人) とした。

テスト問題は、100 単語前後のパッセージ1 つに対して、“local/literal” , “local/inferential” , “global/inferential” の三種類の設問タイプの問題を1 つずつ (計 3 個) 作成した。それぞれのテストセットについてパイロットテストを行い、問題分析を行った結果、各テストセットともに、9 つのパッセージに関して、それぞれ3 問ずつ、合計 27 問を用いたテストを実施した。結果の分析には、設問特性の特定のために Full-information Factor Analysis、テスト項目難易度の特定のために項目応答理論が用いられている。

第5章では、本研究の結果を報告している。まず、リーディング・テスト・パフォーマンスを構築する下位能力として、3 つの因子が特定された。Group A-Low と Group B については、両者ともに第1 因子はテスト項目の「位置」(テスト内での順番)に関わる要因であるということが明らかになった。これは、読みの「速さ」および受験者の「集中力」に関する因子ではないかと解釈している。つまり、受験者が本人の英語レベルと同じレベルの問題を与えられた場合には、まずは問題の「位置」が大きな要因となっている。また、Group A-High のように、受験者の能力からすると難易度の低い問題を与えられた場合は、“local/global” の因子が解答の成否に大きく影響を与えることがわかった。つまり、このレベルの学習者にとっては、情報の収集範囲の広さが大きな影響を与えることがわかる。第2 因子については、Group A-Low および Group A-High では “inferential”、 Group B では “local-inferential” の要素が特定された。

第6章は、考察である。第5章の結果により、テスト実施の前の段階で設問タイプを定義し、それらによって設問の特性を予測することはできなかった。しかし、因子分析の結果より、“local/global” や “literal/inferential” という要因の存在は明らかになったため、十分な被験者およびテスト項目数が確保できる場合には、パイロットテストなどを実施し、その後に設問の持つ「読み」の特性を特定し、その後のテスト実施に活用することは可能であるとしている。

設問タイプとその難易度の関係については、“literal/inferential” の要因にのみ認められ、Group A-Low のように、受験者レベルに相当する難易度の問題を与えられた場合には “literal” の読みを求めるテスト項目のほうが “inferential” の読みを求められるテスト項目よりも難易度が高く、Group A-High のように、受験者レベルよりも下の難易度の問題を与えられた場合には、その逆であることがわかった。このことにより、テスト項目の難易度は設問タイプにより影響されることが明らかになり、さらにこの関係は、学習者の英語能力によって変化することが示された。

第7章では、本論文の結論を述べている。ここでは、第6章で述べられた本研究の結果を総括し、今後のリーディング・テストの研究において設問タイプが測っている読解の内容をリーディング能力の構成概念および能力の指標として着目することの妥当性を述べ、テスト開発におけるテスト項目の位置に関する示唆を行っている。また、本研究の限界として、被験者の能力グループの分類方法などについて、課題が残ることも示唆されている。

## 審査の概要及び評価

高い評価を与えられる点は以下の三点である。①豊富な言語テスト・データを多面的に分析し、また、因子分析の解釈においては、テスト問題に立ち返り質的な解釈を詳細に行った点。②先行研究を概観した上で、リーディング理論およびリーディング・テスト理論に関して、自らの枠組みを提示し、そこから研究設問、分析、結論に至るまで、首尾一貫した論理構成になっている点。③先行研究に立脚しながらも、リーディング・テストの測定している下位能力に関して、先行研究にないオリジナルな視点を持ち込んでいる点。

各審査委員より疑問もしくは批判として指摘のあった改善の余地のある点は、以下の諸点に集約できる。①データの分析結果から、テスト項目の「位置」という因子を導いているが、この解釈の妥当性の検証のためには、テスト項目の順番を変えるなどして再検証が必要ではなかったのかという点。②この研究では、英語のリーディング・テストに関して様々な知見を得ているが、現実のテスト作成場面およびテスト開発のための細目規定において、具体的にどのような示唆があるのかについて、十分に明確にされていない点。③英語の誤りや表記の誤りなど、外形的な誤りが散見される点。

だが、上記のうち特に①②はむしろ本研究の今後の展開の可能性への期待の大きさから生じたものであり、論者の力量を高く評価するからこそ生じた指摘であることは言うまでもない。また、こうした指摘に対する論者の口述試問での応答は、誠実かつ適切なものであり、また、今後の改善についての見通しと方法論を持っていることを確認できるものであった。よって審査委員会は全員一致して冒頭に述べた結論に達した次第である。